



第3回Bio-Symposium報告

平成29年11月12日（日）にConvention Room AP新橋虎ノ門にて第3回Bio-Symposiumを開催いたしました。

今回も3名の先生に講演をしていただく予定でしたが、松本美富士先生が急用のため、急きょプログラムを変更してお二人の先生の講演と質疑応答を交えた総合討論となりました。予定をしていた松本先生の講演はまた日を改めてお願いしたいと考えております。



講演は、第1部で大阪リウマチ・膠原病クリニック院長/東京医科大学医学総合研究所兼任教授で、日本発の生物学的製剤であるトシリズマブの開発グループの一員でいらっしゃる西本憲弘先生が「リウマチ性疾患におけるIL-6阻害薬の有用性」をテーマに生物学的製剤適応疾患や現在進められている治験についてお話をいただきました。また、講演の後半では、ご自身のクリニックで活用されている外来受診患者様用のタッチパネルでの問診についての解説もいただきました。

第2部では、伊勢調剤薬局磯部店薬剤師/一般社団法人伊勢薬剤師会副会長の長島誠先生が「調剤薬局におけるリウマチ財団登録薬剤師の業務～現状と今後の展望～」について実際の調剤薬局で起こっている課題について日本リウマチ財団登録薬剤師ならではの視点での解説を頂きました。

質疑応答を含めた総合討論は各先生方の講演後にそれぞれ行われましたが、フロアからの質問もあり、また、西本先生、長島先生、司会を務めた西岡（当財団理事長）の3者での意見交換も行われ、有意義なシンポジウムとなりました。

今回は、お二人の先生の抄録を掲載いたします。



西本憲弘先生



長島誠先生

次回のBio Symposiumは、2018年2月18日（日）に「Post Bioの将来展望」「AI医療への招待」をテーマに開催する予定です。

開催の詳細については、本財団ホームページなどでご案内させていただきます。

リウマチ性疾患におけるIL-6阻害薬の有用性

西本 憲弘

大阪リウマチ・膠原病クリニック 院長
東京医科大学医学総合研究所 兼任教授

インターロイキン6(IL-6)は、免疫応答や炎症反応の調節を担うサイトカインであり、生体の恒常性維持に重要な役割を果たしている。しかし、関節リウマチをはじめとする炎症性免疫疾患では、IL-6の過剰産生が生じ、多彩な病態が形成される。

IL-6は、自己免疫疾患の病態形成に関するIL-17産生Tヘルパー細胞の分化を促すとともに自己抗体の産生を増やす。発熱や食思不振、体重減少、倦怠感などの炎症症状を引き起こすとともに、CRPをはじめとする急性期タンパクの産生を刺激する。また、IL-6は、破骨細胞の活性化を引き起こし関節破壊や骨粗鬆症にも関わる。したがって、このIL-6の過剰シグナルを特異的に阻害することにより、従来の免疫抑制薬やステロイドとは異なる選択的な治療効果が期待できる。

トシリズマブは、日本で開発された最初の抗体医薬で世界初のヒトIL-6受容体に対する抗体である。IL-6の作用を特異的に阻害することから、IL-6の過剰産生が病態形成にかかわる関節リウマチ、若年性特発性関節炎、キャッスルマン病、高安病などの難治性の炎症性疾患の治療に有効である。その劇的な効果からそれらの治療戦略に大きな変革をもたらした。

講演ではこれらの炎症性免疫疾患におけるIL-6阻害治療の有用性について解説するとともに、Unmet Medical Needsに対するあらたな挑戦を紹介する。



調剤薬局におけるリウマチ財団登録薬剤師の業務 ～現状と今後の展望～

長島 誠

伊勢調剤薬局磯部店 薬剤師
一般社団法人伊勢薬剤師会 副会長

生物学的製剤により、関節リウマチの治療は劇的に変化し、治療成績は飛躍的に向上した。これらの使用量が増えるにしたがって、院外処方せんによる処方数も増加し、調剤薬局においても、その特性上、使用方法・保管方法・副作用等について、他の薬剤よりもきめ細やかな患者教育が必要となる機会が増加している。

生物学的製剤使用患者に対する服薬指導には「保存」「注射時」「廃棄時」「注射後」など各場面に重要なポイントがある。また、副作用として最も頻度が高い感染症はその対策が非常に重要となる。特に「感染予防」の啓蒙は重症化を防止する観点から、是非とも行わなければならない。

また、関節リウマチで使用するDMARDs等の薬剤は他疾患で使用する薬剤と比較して、副作用の面等から、注意の必要な薬剤が多い。調剤ミスの防止や疑義照会の参考として、調剤中にヒヤッとしがちな例を知っておくことは非常に重要である。

今後、生物学的製剤を使用する関節リウマチ患者に対するリウマチ財団登録薬剤師の業務は、がん患者に対するがん専門・認定薬剤師の行っている業務のようになるべきであると考えている。インフォームドコンセント、治療の評価、副作用のチェックを行うことで病院の負担軽減、治療成績や継続率の向上、副作用重症化の軽減に繋がるものと確信している。



一般財団法人難病治療研究振興財団 事務局

〒100-0013東京都千代田区霞が関1-4-1日土地ビル1階

電話:03-3580-8532 FAX:03-3580-8533 E-mail:info@jmrf-nanbyou.org

URL: <http://www.jmrf-nanbyou.org/>

本紙を許可なく転載することを固くお断りいたします